四日市看護医療大学　インドネシア看護師サポートチーム

☆はじめに

私たちは経済連携協定(EPA：Economic Partnership Agreement)に基づくインドネシアからの看護師候補者育成に伴う国家試験対策及び日本語支援を行なっているチームである。私たちのサポートチームは、国家試験の合格に向け頑張っているインドネシア人看護師候補者と既に国家試験に合格し、日本の看護師として働き始めている2名を支援している。このEPAでの看護師は、まだ日本でも少ない状況であり、どのように支援すればよいのか方法は示されていない。また、看護学生にとって国家試験の経験もないため試行錯誤の中で支援を行っている。

※EPAとは特定の国や地域の間で、関税等を撤廃し、モノやサービスの貿易の自由化を図ることを目的とする「自由貿易協定（FTA）」を基礎としながら、投資や人の移動、知的所有権など、より幅広い対象分野について、経済関係の強化を図ることを目的とする協定である。

☆グループのメンバー構成

1 年生 9 人、2 年生 6 人、3 年生 2 人、4 年生 13 人の計 30 人（編入生 1 人含む）で活動している。

☆活動を始めるきっかけ

以前、インドネシア人看護師候補生の日本語の支援の募集があった。「EPA とは何だろう」、「日本語支援や国家試験対策が私たちにできるのだろうか」など不安や迷いはあったが、国際看護には興味があり、教員の勧めもあったので、半信半疑ではあったが、その支援を受け入れた。EPA について調べると、政府はインドネシアとの EPA により 2008 年から看護師の受け入れ事業を開始したと書かれており、海外からの看護師候補者は日本の国家試験を受験しているが、その合格者は 5%も満たないのが現状であるということであった。また、実際、国家試験に合格しても、現場で働くために必要な日本語の習得はできていないため、満足いく現場での活躍ができていないことも分かってきた。そのことを知り、「私たちにも何か出来ることがある」、「インドネシアの方々と交流がしたい」と思い、活動に参加した。

☆活動の目的

私たちの活動の目的は、インドネシアからの看護師候補者に、日本語の学習のフォローを行い、国家試験に合格できるよう働きかけることである。既に国家試験に合格して看護師となったインドネシア人看護師には、医療従事者として現場で活躍できるように日本語力やコミュニケーション能力を高めてもらうよう学習支援に努めている。また、日本でより活躍してもらえるように、日本の文化を知ってもらい、多くの日本人の生活や気持ちが少しでも理解しやすくなるように働きかけている。この活動は、インドネシアからの看護師候補者だけが支援を受けるのではなく、私たち看護学生自身の国家試験対策に繋がると共に文化交流の場ともなり、国際的視点、広い視野がもてることにもなる。

☆現在の主な取組内容

現在の取り組みとして、1、2 年生が合格者への実用的な日本語支援を行い、3、4 年生が国家試験対策を行っている。

1、2 年生の取り組みとして、日本語支援では毎週木曜日の授業後(17：50～19：20)に、看護を行う現場でよく用いられている漢字の練習や、看護現場で必要な会話表現を、本「専門日本語入門　場面から学ぶ看護の日本語【本冊】【漢字練習】」を基に一緒に学習を行っている。最近では、より現場に近づけるために、申し送りの練習や私たちが患者役になり、病院のクリティカルパスに沿った演習を行っている。

3、4 年生は国家試験対策を中心に行っており、週に数回、共に国家試験の問題を解きながら、日本語として理解できないところは説明をし、解説を活用しながら、合格に向けて学習を進めている。特に 4 年生は、同じ国家試験を目標としているため取り組みにも熱が入っていた。

インドネシア看護師　　インドネシア看護師

↓　　↓

日本語支援と共に交流を深めるために、インドネシアの看護について理解を深めるためのプレゼンを行ってもらったり、日本の文化を知るために京都旅行に行ったり、定期的な食事会も行っている。

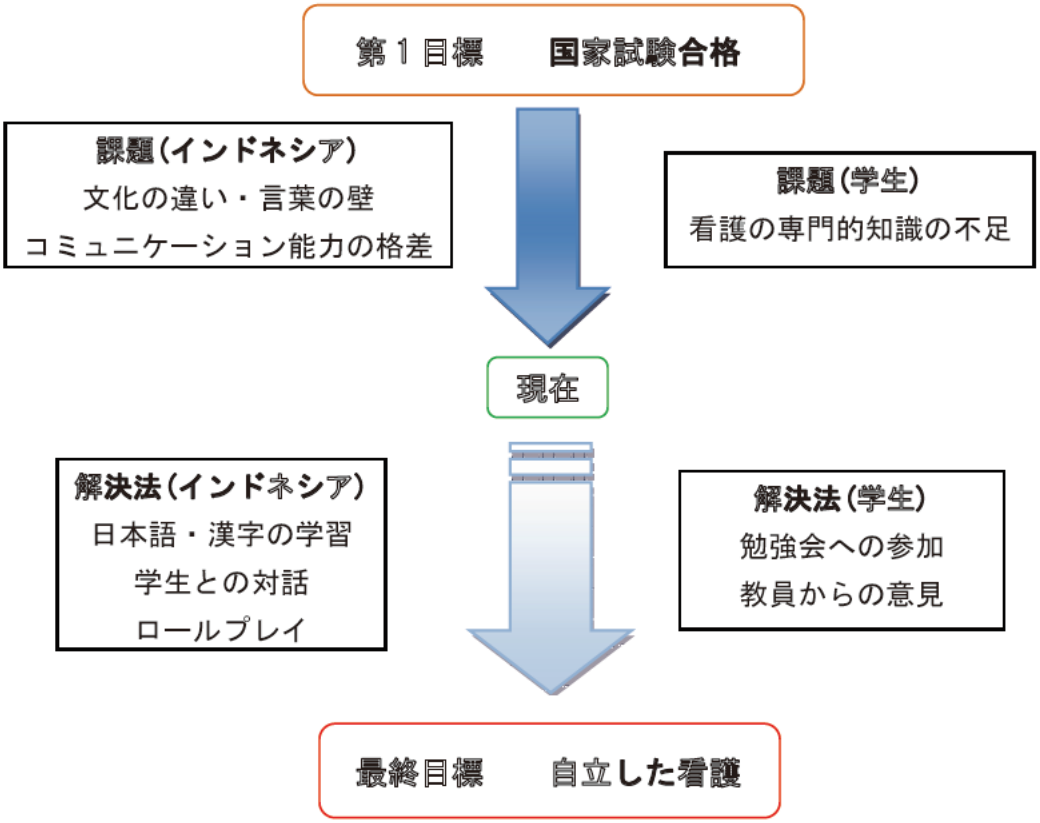
天龍寺に
行ってきました！

京都旅行
満喫中！！

2012 年 12 月 8 日（土）
京都旅行にて

☆現在の課題と今後（将来）の方向性、夢

海外からの看護師候補者の国家試験合格を第１目標とし、現場で自立した看護を行えるようになることが最終目標である。

しかし、実際に働き始めると文化の違い、言葉の壁に突き当たるなど多くの問題が起こってくる。臨床現場で安全に看護を行うためには、患者さんとのコミュニケーション、電話応対、報告、連絡、相談、記録などを含む、看護師として働くうえで専門的な能力が重要となってくる。そのような状況のなか、専門的な日本語の能力が不足しているためにコミュニケーションが思うようにとれず、合格してもモチベーションが下がり、インドネシアで働いていた時のように生き生きとした看護ができていないのではないかと感じている。また、1、2 年生が行っている、日本語の支援については看護の専門的な学習が進んでいないことによる、現場に基づいた日本語指導が行えていないのが現状である。

今後、私たち看護学生はさらに専門的な学習を進め、的確な日本語を用いてその状況が説明できるような専門的知識と国語力を高める必要があると感じている。彼女たちに日本の文化を知ってもらうだけでなく、私たちも日本の文化やインドネシアの文化についても理解を深めるように努めていきたい。さらに、彼女らと交流を深め、共に看護師として広い視野を持った看護が行えるような人に成長していきたいと思う。